

論 文

癌告知を受けている終末期患者の安らかな 死受容に対する介入方法の検討

北川 敦子・窪田恵津子・杉田 明美・所村 和子
浦上 千波・吉田 綾子・前多 公子
(金沢大学医学部附属病院)

A Search for the Optimal Methods of Helping Patients Accept Their Impending Death following Disclosure of Their Having Fatal Malignancies

Atsuko Kitagawa, Etsuko Kubota, Akemi Sugita, Kazuko Syomura,
Chinami Uragami, Ayako Yoshida and Kimiko Maeda
Kanazawa University Hospital

要 旨

近年、日本でも癌告知の傾向が高まり、癌告知により、自分の病気を知り、QOLの高い最期を送りたいという患者も増えてきている。私達は発病時に癌告知を受け、終末期において死を受容し安らかな死を迎えた2事例(A・B)の分析を通し、死受容にいたるまでの移行要因及び安らかな死を迎えるための介入方法を明らかにし、終末期の看護に役立てようと考えた。

事例Aは、死受容に向かうまでの時期は5時期に、事例Bでは、3時期に分けられた。経過が異なっても同じ時期がみられた。各時期のニーズは共通のものとなったものがあったが、介入方法は個別であった。各時期への移行に影響した要因は、経過時間の長短に関わらず、全身状態の悪化の自覚、医師からの状態の説明が共通していたが、事例Aでは、同病気者の死の遭遇もあった。次の時期への移行を促す介入方法は、個別であった。